

動物意識の起源：心の科学と哲学の新展開

田中 泉吏 (Senji Tanaka)

慶應義塾大学

トマス・ネーゲルが「コウモリであるとはどのようなことか」(Nagel 1974)を出版してから半世紀が経とうとしている。この間、動物の心や意識にかかわる科学研究は大きく変化した。まず、研究対象には哺乳類や鳥類だけでなく脊椎動物全般、さらには頭足類や昆虫などの無脊椎動物も含まれるようになった。「キンギョであるとはどのようなことか」や「タコであるとはどのようなことか」、あるいは「ミツバチであるとはどのようなことか」といった問いまでもが科学研究の俎上に載せられているのである。その背景には、多様な生物種の心に関する比較認知科学の進展がある。また、研究手法も一変した。発生学と遺伝学を統合した発生遺伝学が登場し、さらにそれが進化学と結びついて進化発生学という分野が生まれ、脳・神経系の発生過程とその進化を包括的に探究する枠組みが成立した。古生物学にも大きな発展があり、カナダのバージェス動物群や中国の澄江動物群を初めとするカンブリア紀の化石動物の研究から得られた膨大なデータが利用可能になった。こうした研究成果を踏まえて、「～であるとはどのようなことか」というその何か（すなわち「現象的意識」、「感覚意識」などと呼ばれるもの）が初めて獲得されたのは、いつ、どの系統の動物においてであったのかということまで推測されるようになったのである。心の科学は今まさに新展開を迎えつつある。

これを踏まえて哲学者の考えるべき事柄には、少なくとも以下の2つがある。一つは、半世紀前とは様変わりした心の科学の成果から心の哲学は何を学び、それを意識の問題の解決に活かせるかどうかを吟味するという作業である。しかし、その前に、新しい生物学的アプローチによって動物の心や意識がはたしてどこまで解明できるのか、そこに何か深刻な方法論的瑕疵はないのかと、冷静に検討することも求められよう。そうした検討には、1980年代以降著しく発展した生物学の哲学分野の知見が活かせるはずだ。

そこで、このワークショップではまず、鈴木大地が、進化発生学の手法で心の科学研究を推進する立場から、動物意識の起源に関する最新の研究成果（例えば『意識の進化的起源—カンブリア爆発で心は生まれた』、『意識の神秘を暴く—脳と心の生命史』(Feinberg & Mallat 2017, 2018)、『動物意識の誕生—生体システム理論と学習理論から解き明かす心の進化』(Ginsburg & Jablonka 2019))を比較し、それらを総合した一般モデルを提示する。次に、網谷祐一が、生物学の哲学の立場から、新しいアプローチに対して方法論的な検討を加える。その際、ヒトの心の進化研究として従来批判的となってきた社会生物学や進化心理学が引き合いに出され、それらと対照しながら考察が行われる。最後に、以上の提題を受けて、動物意識の起源に関する科学的知見から心の哲学が何を学べるのかという論点を

中心に、太田紘史（新潟大学）と鈴木貴之（東京大学）がそれぞれ簡単なコメントと質問を提示する予定である。